

女性医療。でもその前に「女性学」

アルファ社会科学株式会社 本川 裕

私が関心を寄せている統計データの中には、身体に関して、戦後、性差が大きく広がったものがある。すなはち、BMIである（図）。

終戦後には、20歳代～70歳以上のすべての世代で、女性のほうが男性よりBMIが高かった。すなはち、男性のほうが女性より痩せていた。戦後の経済発展は日本人の栄養状態の改善をもたらし、さらに近年は飽食にまで至っている。この結果、男性は戦後の過程で一貫してBMIを上昇させてきており、最近は肥満が憂慮される状況となっている。

ところが、BMIの動きが女性の場合は男性と全く異なっている。20歳代の女性は戦後すぐにBMIが低下する方向に向かったが、30歳代以上の女性は、しばらく男性と同じ上昇傾向を辿ったものの、30歳代、40歳代と年齢の低い順に、20歳代の若い女性の後を追ってBMIの下降に転じた。この結果、20歳代～50歳代の各年齢層で、次々と1960年代、70年代、80年代、90年代にBMIの男女逆転が起こり、また60歳代と70歳以上では2000年代に起こった。

男性の場合は年齢を問わず肥満化傾向が見られるのに対して、女性の場合は若い女性からはじまって、ついには70歳以上にまで、時間差を伴ながら、スリム化志向が支配的となっていましたのである。そして若い女性については、さすがに痩せの弊害が健康上問題とされるに至り、官民を挙げての改善運動の結果、最近では反転が起こっている。

このようにスケールの大きな性差の進行には、日本人の男女は果たして同じ生物種なのだろうかという疑いまで感じるぐらいである。なぜ女性は自らの体格をこのようにコントロールしたのに、なぜ男性はしなかったのだろうか。美しく見せたいという動機は、健康を維持したいという動機とは比べものにならないほど強いのだろうか。

女性医療の発展のためには、こうした点を含め、医学と社会科学との接点となるような「女性学」の追究が不可欠だと思われる。

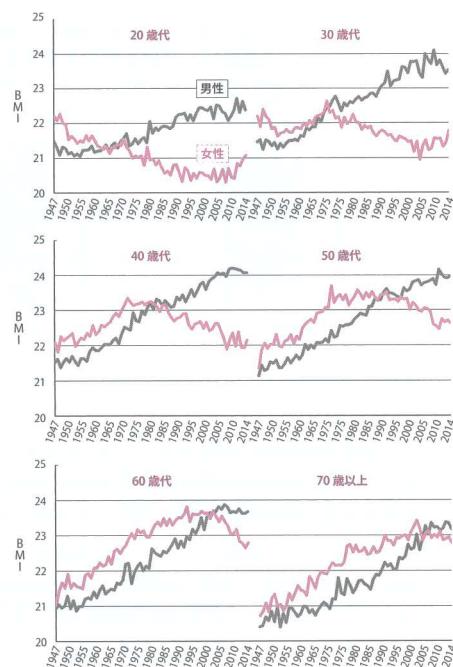


図 男女年齢別のBMI推移

(注) BMIはここでは平均体重と平均身長から算出
(資料 厚生労働省「国民健康・栄養調査」(1974年身長体重調査なし))